

# 天文学の裏方さん

## 名大空電研の巻

東西六百米，南北三百米，一面に雑草が生茂り，その中より松や灌木が頭を出している。それらのない所が道路や観測室や庁舎である。この中の住人は，雉，野兎，鼯，もぐら，野良犬，鳩，その他の小鳥たち，へび，蜥蜴，それと人間である。梅雨明けの空電を訪れた人は，身の丈程にのびた雑草の生きのよさに驚嘆するであろう。それらの葉は，夏の陽にきらきらと輝いている。植物を，これだけ立派に育てることの出来る人物は，恐らく日本中どこにもいまい。萩，すすき，虎杖（いたどり），その他名前を思い出すのも忌々しいほどだ。

たしかに七，八年前までは虎杖全盛時代であったのが，不思議なことに，いつのまにか，萩にその王座を取って替わられてしまった。

草いきれが空電を包む。蚊と，へびと，蜥蜴の，天下である。屋下がり，空電のメインストリートのプラタナスの涼しい木蔭で，青大将が昼寝をしているのが見られる。そのころ，人間である観測係は，真昼間であるというのに非常識な蚊の襲撃と，暑さに悩まされながらとびまわっているのだ。3750メガヘルツ干渉計が観測を開始したのも，たしかにこの季節であった。レコーダーを見て，首をかしげた。加算側の記録はちゃんと出ているのに，掛算側は，なんとも理解にくるしむ。

掛算であるから干渉パターンが，隣合って互違いに出現しなければならぬのに，無茶苦茶なカーブが出てくるのだ。しかし，まもなくその原因が判明した。干渉計の上を，断れ雲が通過しているのだ。お日さまが，照ったり，照らなかつたり，そのたびに，導波管が熱膨脹で延びたり，縮ちんだり。位相に弱い掛算干渉計の欠点をつかれたのだ。このような事も，今は技術的に克服した。この頃になると，空電の片隅で，面白い植物の活動を見ることが出来る。この雑草の大きな絨氈は，東西600米で，3米以上の傾斜を持っている。

そこで雨水は，必然的に低い方に流れて，そこに湿地に似たものをつくる。そこに小さい食虫植物が育つのだ。ネバネバした透明な水飴のような液をつけた毛氈苔は，深い小豆色に輝いている。苔のくせにあたかも，チ

ョウチンアンコウのチョウチンのように，細い茎の先に，赤い花に似た，奇妙なものをつけている。もう一種類は，白い小さな花と毛氈苔と同じような液をつけた緑色の触手を持った，高さ約30センチ位の可愛い草である。そこには，哀れな蚋（ぶよ），蟻，その他の小昆虫が捕えられている。空電の秋は素晴らしい。萩が一つ一つ見ると上品な，小さな，赤紫の花を一枝一枝念入りに咲かせるのだ。サービス過剰ぎみに所内一面に咲かせるのはいささかげんなりする。朝夕は涼しくなるので鼯が下水溝から姿を現わす。デパートのウィンドに飾られているのとまったく同じのつやつやしたきつね色のスマートなやつだ。細長く身体の半分をしっぽが占めている。まったく，神さまは，彼に襟巻になるためのプロポーションを与えたのに違いない。まわりを見まわして出てきた下水溝にするすると帰っていく。彼は強度の近眼である。なぜなら約2米前にいる私に，全然気がつかないのだから。

昼間と夜間の温度差の大きいのもこの季節の特長であろう。その結果干渉計の導波管が熱的歪を受け，曲りの部分のバンク事故が多発する。その割目を見つけたそそっかしい蟻どもが，格好の冬ごもりの場所と突込んで，一族全員，卵までもって移り住んでしまう。

気づいた時は導波管の内面は蟻酸で腐蝕されてしまっている。秋も深くなるとおいしい自然薯が取れる。これは古来から栄養豊富で非常にキクものとされている。ここで重要な事は，これを掘り取るに要するであろうエネルギーと食べることによって得られるであろうエネルギーの損得勘定を慎重に行う必要がある。それは自然薯と平行して地面に垂直に小さな物で60センチ位，大物になれば，1メートル50センチ以上の深さの直径30センチ位の穴をスコップで掘らなければならないからである。掘り上げたのを水で洗うと真白になる。八百屋で売ってる茶色の薄汚ないやつとは，まったく違うのだ。これで作ったとろろ汁の旨いこと，天下一品である。

このような自然環境の中で，文字通り，雨の日，風の日も，日曜，祭日関係なく365日，太陽の出ている夜間以外は，5人の観測要員で観測をつづけているのである。

たので，この趣旨に沿って7月末までに新定款案に対する修正案を「三鷹市大沢，東京天文台内，日本天文学会」宛お寄せ下さるようお願いいたします。

1971年5月22日

日本天文学会理事長 奥田豊三

### 学会だより

日本天文学会会員各位

春季総会において下記のような申し合わせがなされました。

## 記

天文学会改革についての総会申し合わせ

1971年5月21日

日本天文学会総会

1970年5月13日の総会における申し合わせに沿って学会改革の早期実現のために運営検討委員会の答申定款案に対する修正案を集め、会員の検討を経て原案の作製に努力することを理事会に要請します。

日本天文学会の総会で、改革委員会委員長の要望(天文月報5月号付録)により天文学会の改革問題についての討論が行なわれた。改革委員会発足までの経過については、同付録の「参考資料1」「1. 改革委員会発足までの経過に要約されている。

改革委員会の任務は、新定款に移行後の実行可能な青写真を作成することであり、その議論において東京支部の体制についての評価が大きな問題となったようで、その評価について、5月号付録の「参考資料1」を書いた委員と、「参考資料2」を書いた委員とは正反対であることから、改革委員会での各委員の意見がかみあわなかったことは想像できる。委員長は、「参考資料3」の小平委員の「新定款定施の際の東京支部の実務面は支えられるが、円滑な支部活動を行なうためには新定款の利点欠点をもっと明らかにすることが望まれる」という結論を尊重し、「いまだ公にされていない反対意見を述べる討論の場を総会のおりにもうける」ことを要望されたことと思う。

ところで、総会で発表された新定款についての反対意見で別に目新しいものはなく、ここ2年ほどの天文月報をくわしく読めば見つけられる議論がむしかえされたにすぎなかった。また、昨年5月の総会での申し合わせやその後の学会のうごきと関連して筋を通すべきだとの意見も強かった。

しかしながら、この討論を通じ争点はかなりはっきり

してきたと思う。その主なものは、

(1) 天文学会のなかで研究者独自の問題をどんな形で解決するのか。

(2) 天文学会のなかでアマチュア活動をどう位置づけるのか。

(3) 上の2つの問題は、新定款となって公選された評議会ではじめて解決されるのか、これがかたずかないうちには新定款に移れないのか。

であり、新定款の実施がおくれている現在、これらの点について会員相互間での誤解を少なくすることが、これからの課題となろう。互間での誤解を少なくすることが、これからの課題となろう。

(1) についていえば、現在の天文学会は研究者独自の問題を解決するだけの組織ではないが、これは他の多くの学会でも同じで、天文学会だけが特別の存在ではない。研究者独自の問題を解決するには、学会内に特別な組織を作るのか、学会の運営を行なう機関にその任をまかせるのか、後者の場合、研究者に評議員などの選出に特権を認める必要があるのか。

(2) については、研究者会員のなかには、新定款移行後に、アマチュア活動組織による研究者の負担が増大すると心配している人がかなりいる。この点についてアマチュア活動を行なっている会員の方はどういうイメージを持っているのか。そもそも日本天文学会内であらたにアマチュア活動を組織する必要がどれほどあるのか、といったことが問になろう。

上の2つの点でのイメージが明らかになれば、(3)の問題も、東京支部体制の評価の問題も会員多数の間で合意がえられるだろう。

以上かんたんに、私見を加えつつ学会改革問題についての解説をこころみつつもりであるが、ここでのべた争点についてはすでに議論はできていると思うが、会員諸氏が新定款問題について率直な意見を表明し、この問題が一日もはやく解決することを望んでやまない。

東京天文台 古在 由秀

1971年4月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	6,	45	6	7,	28	11	6,	36	16	—,	—	21	8,	101	26	5,	58
2	—,	—	7	6,	39	12	12,	67	17	—,	—	22	—,	—	27	4,	56
3	—,	—	8	6,	57	13	10,	84	18	—,	—	23	8,	46	28	4,	65
4	—,	—	9	—,	—	14	11,	100	19	12,	124	24	7,	20	29	—,	—
5	6,	34	10	5,	29	15	—,	—	20	10,	119	25	3,	30	30	4,	31

(相対数月平均値: 92.5)

昭和46年4月20日

印刷発行

定価 125 円

編集兼発行人 東京都三鷹市東京天文台内

印刷所 東京都文京区水道2-7-5

発行所 東京都三鷹市東京天文台内

電話武蔵野 31局 (0422-31) 1359

森 本 雅 樹

啓文堂 松本印刷

社団法人 日本天文学会

振替口座東京 13595